

## 青少年の社会参加を促進する環境整備と機会提供のありかた

－BrainHumanity にみる学生の社会参加意欲の向上－

川 中 大 輔

### はじめに－自己紹介と報告構成

1

#### 1-1. 自己紹介

- －(特活)BrainHumanity リージョナル・パートナー（元副理事長）
  - －野外教育、不登校児童支援、国際ワークキャンプ、学習支援ほか
- －シチズンシップ共育企画代表・ファシリテーター
  - －NPO マネジメント支援、人間関係トレーニング、市民教育プログラム立案ほか
- －(財)大学コンソーシアム京都研究主幹
  - －単位互換事業、インターンシップ事業、共同研究事業ほか

#### 1-2. 本報告の流れ

- (1)BrainHumanity はどういう団体か？ どういう活動をしているのか？
- (2)BrainHumanity で学生はなぜ社会参加に熱心になるのか？
- (3)BrainHumanity の実践は、何が参考となるのか？

### BrainHumanity の実践

2

#### 2-1. 子どもの「生きる力」を巡る課題

- －「ムダ・ムリ・ムラ」のない子ども時代
  - －ムダがない・許されない：失敗とチャレンジの不足
  - －ムリをしない：甘え坊で、可能性を自分で狭める
  - －ムラがない仲間づくり：異質な人との付き合い下手
- －圧倒される「目からウロコ」の体験の不足
  - －自然体験活動や「ムチャな遊び」の体験の不足
  - 「遊び」などの共同作業の中で、「共に生きる力」を育む活動の提供へ

#### 2-2. BrainHumanity のミッション

- －キーコンセプト
  - 「多様な価値観」と「多様な選択肢」
  - 学生の成長と社会参画の促進
- －活動のねらい
  - (1)子どもたちの多様な価値観形成のために、多様な他者や価値と出会い、自分の選択

- を行なう場を創造する
- (2)子どもたちが、多様な選択肢の中から自己責任で自分の生き方を選べる社会を構築する
  - (3)1 と 2 の活動を学生が担う中で、自然に学生自身の価値観の多様化を促し、また「市民」としての成長を目指す。

## 2-3. BrainHumanity の活動

- －レクリエーション事業
- －不登校関連事業（「Home Education Project」や保護者のピア・サポート・ネットワーキングなど）
- －国際ワークキャンプ事業（Habitat for Humanity 等の NGO との協働による高校生ワークキャンプ）
- －被災児童支援事業
- －学習支援事業
- －まちづくりに関する事業
- \*年間収入約 5000 万円（ほぼ事業収入）、約 50 プロジェクトを実施
- \*学生ボランティア 150 名が実働し、全企画を企画/運営している。  
（法人経営も学生に担われている）  
→理事会も経営戦略会議も常務会も事業部会もすべて学生主体

## 2-4. 全国初、学生主体の NPO 法人

- －学生が中心となる組織：「表舞台」と「裏舞台」で専従職員と役割をすみわける
  - 活動の「表舞台」を担うのが学生で、そのためのサポーターとしての職員
    - 活動の「表舞台」：「子どもと関わること」に関係する場
    - 活動の「裏舞台」：学生の指導、法人事務や公式会議出席など
- \*職員態勢：専従 3 名（2006 年 3 月現在）

# BrainHumanity の学びのメカニズム

3

## 3-1. BrainHumanity が輩出する人材像（結果論として）

- －基本的には自分の仕事とその成果に責任を持つプロジェクト・マネジャー、スタッフ
  - －同時に他人の仕事を理解し、慮るチームワークを理解する
- －状況に最適なバランスのとれた意思決定をくだせるディレクター
- －市民セクターを担う「市民」：市民セクターというものの価値を理解している

### [参考] BrainHumanity における学びのイメージフラッシュ（2001 年）

チームワーク、異年齢間交流する力、忍耐力、体力の大切さ、社会的ポジションの確認、自分の限界、言語化能力、報告する力（まとめる力）、情報伝達能力、論理的思考力、ケーススタディする力、プライオリティの選択能力、効率的な時間の使い方、意思決定・判断能力、課題発見能力、論点発見能力、ディスカッション能力、プロジェクト・マネジメント能力、会計処理能力、資金管理能力、金銭感覚、PC スキル、企画力、社会性／社交性、プレゼンテーション能力、リーダーシップ、市民セクターの多様性、新しい労働観、ボランティア観、NPO の専門知識、学校的価値観以外の評価軸、社会人の力、学生のポテンシャル、

### 3-2. BrainHumanity の学びのメカニズム

- (1) 「体験から学ぶ」文化を獲得する：ふりかえりの習慣化
  - －体験から学び取ったことを次に実践できているかが問われる緊張関係
- (2) 「必要とされる自分」に気づく：self efficacy の向上
  - －「必要とされる自分」になろうとする努力が求められる
- (3) 「若者の可能性」に気づく：身近にあこがれる存在との出会い
  - －エッジを越える快感に皮膚で触れる
- (4) 「市民社会の可能性」に気づく：異世代のモデルとの出会い
  - －ネットワークの世界で自分の力を相対化させられる
  - －「先輩」からの信頼が自信の形成を支援する

### 3-3. 動機を問わず、動機の変化を問う

- －「動機」ではなく「行為」に注目する
  - －動機は変わるということをポジティブに捉える
- －「私のため」「あの子のため」「子どものため」という目的意識のバランス
- －動機の変化を促す「ふりかえり」と「ニーズとの向き合い」

### 3-4. 必要とされることで没入する

- －「感謝されること」の重み（ケアしつつ、ケアされる）
  - －他者のあて先になる、子どもの前に立つということ
- －「私がやらずして誰がするのか？」という状況
  - －期待（される成果）が明確な役割
- －加えて、やればやるほど、成果が出る環境
  - －企画/運営に没頭する学生たち
- 大学生になって、「はじめての没入」がある：「ひたむき」へのあこがれの接近
  - －社会における「自分の必要性」を実感する

### 3-5. 「至高のフロー」(optimal flow)体験をもたらす環境整備（ノーマン 1996）

- －インタラクションとフィードバックが豊富にある
- －明確な目標ときちんとしたルールがある
- －動機づけがある
- －常にチャレンジの感覚がある。チャレンジは絶望感や挫折感を生むほど難しくもなく、退屈するほど簡単でもないこと
- －直接関与の感覚がある。これにより環境を直接体験し、タスクに直接働きかけている感覚が生まれる
- －ユーザーとタスクにうまく合っていて、その助けになり混乱させない適切な道具がある
- －主観的体験を邪魔したり壊したりするような妨害や注意の分断がない

### 3-6. ボランティアにもプロフェッショナルリズムを導入する

- －ボランティアは権利も義務もある
  - －選択できる権利があり、選択したら完遂する義務を負う
- －ボランティアの義務に基づき、しっかりと「追い詰める」
  - －「なあなあ」を許さず、エッジに挑戦することを歓迎する文化
- －「ゆらぎ」が成長をもたらす（尾崎 1999）

- 「実践の中で経験する動揺、葛藤、不安、 迷い、わからなさ、不全性、挫折感」
- 「ゆらぎ」は自己変革に向けた覚醒の機会
- プロフェッショナルリズムを備えた同世代との協働を通じた意識昂揚

### 3-7. 成長への意欲を原動力にする

- 学生は新しい自分への革新を求めている
  - 「今のままでいいのだろうか」という漠然とした不安
  - 身近なメンバーの大きな成長に対する「取り残されないか」という不安
- チームワークで「ひとりではできないこと」を達成する
  - 大きな成長の実感（の共有）
  - このプロセスから「青臭い」仲間ができていくということも意欲に貢献する
- 単に成長しただけではなく、それを活かす場がすぐにある
  - 常に試し、伸び続けることが可能

### 3-8. オフィシャルに物語る場をつくる

- 物語る＝言語化を通じた意識化の実現
- 社会の中での「位置づけ」に否応なくさらされる
- 物語る場面の例
  - 地域住民や顧客へのプレゼンテーション
  - 事例報告会や外部の研修会
  - メディア対応
  - 送別会でのスピーチ など

### 3-9. ミッションによってつながるボランタリーネットワークの強みを活かす

- 既存の人間関係ではなく、ミッションを媒介項にする関係
  - ミッションに基づく目標の実現への強いコミットメントがある
- 自分を変えるために、周囲環境を変えることも一策

## まとめ－若者の社会参加意欲が向上するために

4

- 若者を「子ども」ではなく「大人」として扱う
  - 「指導してから任せる」ではなく「任せながら指導する」
  - 「責任を負いきる」ということを学習する：最終的な目標選択は個人の判断を尊重
- 「作業」ではなく「仕事」をすることを支援する
  - インターンシップやボランティア活動を「お仕事体験」に留めない
  - 企画から運営まで「まとまった」活動を「やりきる」ことの必要性
- 中間集団を学びのコミュニティとして育む
  - モデルとライバルと刺激を与え合う関係性を育む
  - 体験からの学びに気づくふりかえりの機会の提供
  - ユースワーカーのトレーニング強化の必要性

## ■感謝される経験の場を提供する

- －「少年は必要とされて大人になる」(J.スタインベック)
- －待っている人がいるから、ある意味「逃げられない」：緊張感ある活動機会の提供

人はだれも自分が必要とされていることを知り、感じなければならない。

人はだれも一人の人間として扱われたいと望んでいる。

責任を負う自由を与えれば、人は内に秘めている能力を発揮する。

情報を持たないものには責任を負うことはできないが、情報を与えられれば責任を負わざるを得ない。

ヤン・カールソン『真実の瞬間』(堤猶二訳、ダイヤモンド社)

## 主要参考文献

- アレン,ケン 1998 『ボランティアが変える世界』榎田勝利監訳、アルク
- 尾崎新 1999 「『ゆらぎ』からの出発－『ゆらぎ』の定義、その意義と課題」、尾崎新編『「ゆらぐ」ことのできるカーゆらぎと社会福祉実践』誠信書房、pp.1-30
- 加藤哲夫 2002 『市民の日本語－NPOの可能性とコミュニケーション』ひつじ市民新書
- 川中大輔 2003 「『パブリックなこと』をひらくメディア・リテラシー－公共圏を通じた社会変革のアプローチに関する一考察」関西学院大学卒業論文
- 2004 「地域課題の解決に参画する体験から学ぶ」、『社会科教育』547号、明治図書、pp.14-15
- 2005 「学校における『市民的リテラシー教育』導入の方向性－教育を通じた公共圏のコミュニケーションの成熟化に関する一考察」立教大学大学院修士論文
- 2006 「深い協働関係をつくるボランティア・マネジメント」、『NPOジャーナル』第13号、関西国際交流団体協議会、pp.38-41
- 興梠寛 2003 『希望へのカー地球市民社会の「ボランティア学」』光生館
- 津村俊充・山口真人編 1992 『人間関係トレーニング－私を育てる教育への人間学的アプローチ』ナカニシヤ出版
- 長尾文雄 2004 「学生による学生自身のための＜学びの実験＞－学生主体 NPO 法人の事例」、南山大学人間関係研究センター『人間関係研究』第3号、pp.69-92
- 中村正 1997 「学びのハビット（習慣）」、『立命館大学教育科学プロジェクト研究シリーズⅧ』、
- ノーマン, D.A. 1996 『人を賢くする道具－ソフト・テクノロジーの心理学』佐伯胖監訳、岡本明・八木大彦・藤田克彦・嶋田敦夫訳、新曜社
- 部落解放・人権研究所編 2001 『人権の学びを創る－参加型学習の思想』解放出版社
- BH ボランティア委員会編(委員長:川中大輔) 2001 『BH におけるボランティア・マネジメントに関する調査研究』BrainHumanity
- BH ボランティア・マネジメント委員会編(委員長:川中大輔) 2002 『BH ボランティア・マネージャー7つのお仕事』BrainHumanity

< プロフィール >

川中大輔 KAWANAKA, Daisuke

シチズンシップ共育企画 代表・ファシリテーター

(特活)BrainHumanity リージョナル・パートナー、(財)大学コンソーシアム京都 研究主幹

(特活)まちなか研究所わくわく理事、公益・非営利支援センター東京コーディネーター

1980年、兵庫県生まれ。関西学院大学社会学部卒。立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科修士課程修了。専攻は、社会学、社会デザイン学、公共圏論、NPO論、市民教育論。

1998年の冬から野外教育や不登校児童支援の活動に取り組み始める。青少年の「育ち」を支援する学生主体NPO法人であるBrainHumanityの設立に参加し、副理事長・事務局次長ほか歴任。各種イベントの企画運営や、ボランティア・マネジメントなど、人材育成面を中心とする組織マネジメントを担当した。2003年より、同会リージョナル・パートナー。

2001年より、全国各地で市民組織のマネジメント講座や人間関係ワークショップの企画運営やファシリテーションを担当している(年間50本程度)。2002年度には、神戸市まち育てサポーター(垂水区担当)補佐を務め、高校生のまちづくり参加に関する調査やワークショップを実施した。

2003年度には情報誌『NPOマネジメント』を編集発行するIIHOE[人と組織と地球のための国際研究所]フェローを務め、NPOと企業・行政の協働プロセスに関する調査報告プロジェクトなどを担当した。

2003年、シチズンシップ共育企画を設立。コミュニケーション力、協議力、マネジメント力、社会問題発見力からなる「市民力」の向上を支援している。現在、同代表・ファシリテーター。

2005年より、財団法人大学コンソーシアム京都研究主幹。専門学校講師や国際青年環境NGO・A SEED JAPAN理事(人材育成担当)も歴任し、現在は他に、公益・非営利支援センター東京コーディネーター、NPO法人まちなか研究所わくわく理事、(財)京都市ユースサービス協会企画委員などを務める。

「教育」の変革を通じた、公共圏のコミュニケーションの活性化が研究／実践の全体を貫くテーマである。

◎シチズンシップ共育企画ウェブページ <http://homepage2.nifty.com/citizenship/>

◎BrainHumanity ウェブページ <http://brainhumanity.or.jp/>

◎大学コンソーシアム京都 <http://www.consortium.or.jp/>